

山と博物館

第56巻 第9号 2011年9月25日

市立大町山岳博物館



徳本峠小屋

登録有形文化財の山小屋―

「徳本峠小屋休憩所」と「嘉門次小屋囲炉裏の間」

梅干野 成央

平成23年7月15日の文化審議会において、新たに178件の建造物を登録有形文化財にするよう、答申があった。ここに「徳本峠小屋休憩所」と「嘉門次小屋囲炉裏の間」が含まれていたことに注目したい。

徳本峠小屋は、島々から上高地に至る登山道の最高地点である徳本峠標高2135mにたつ山小屋。大正12年(1923)に開設された。「徳本峠小屋休憩所」は、その原形の部分にあたり、当初の姿をよく伝えている。一方、嘉門次小屋は、明神池の畔(1540m)にたつ山小屋。山案内人として多くの著名な登山者の山行に同行した猟師の上條嘉門次に由来する。「嘉門次小屋囲炉裏の間」は、嘉門次の猟小屋を大正8年(1919)から大正11年(1922)の間にたてかえたものだが、かつての暮らしをうかがい知ることができる。

この2件の山小屋は、ともに日本の近代登山の普及に大きな役割を果たした。今回の答申でも、それが評価された。全国の登録有形文化財の建造物は計8703件になるが、近代登山に関連する山小屋は、この2件だけだろう。文化財の全体をみわたしても、立山の室堂(重要文化財)が加わるほど、これまで山小屋は文化財とあまり縁がなかった。これは、山小屋の建造物についての調査が十分に進められてこなかったためだ。山小屋の建造物には、価値の高いものが多数ある。

1857年に世界最初の山岳会が英国で発足して以来、世界の広い範囲に近代登山の文化が広まった。これとともに、世界の山岳には、それぞれの文化的な背景にもとづいて、山小屋が開設された。日本の山岳でも、明治時代の終わり頃から近代登山の歴史を物語るだけでなく、日本の山岳と世界の山岳をつなぐ文化的な観点としても有効だ。その意味で、山小屋の建造物の研究は深化が必要であり、また、今回の答申でこの2件の山小屋が登録有形文化財となった意味は大きい。

社会人山岳団体 登歩溪流会（愛称「とほけるかい」）

その誕生から終焉までの概要

尾崎 芳

はじめに

平成19年春頃より私の手元に送られてきた当会の古い会報や関係書籍を、自分の所に保管して置いても自分が世を去ればまた誰かの所へ送られ、同じことを繰返す事になるので、その処分方法をOB会の総会にはかったところ、こんな古い記録など今は何の役にも立たないから廃棄しろとの意見もあったが、山岳博物館で引取って貰えるものならば寄贈したかどうかとの声にまともだったので、市立大町山岳博物館に相談したところ、了解を頂いたので寄贈することに決まった。しかし不足している部分かなりあるため会員諸氏に連絡しその提供を受け平成21年末には存在不明の2部を除いて集まったので、翌22年春にようやく寄贈する事が出来た。

寄贈に出掛けたその席で、博物館の学芸員清水隆寿氏より、寄贈資料をここまでまとめられたのなら、博物館で発行している冊子「山と博物館」に「登歩溪流会」と寄贈書籍の紹介文を出されてはいかがかとお話を頂き自分には不得手な事ではあるが、後日何かのお役にもたてばと思いい記述してみる事にした。

創生の頃

大正12年の関東大震災により江戸の名残の建物は叩き壊され、第一次欧州大戦でふくらんだ富も無くした日本経済は空前のパニック

に襲われ、街の空気は絶望的な「かれすすき」から「ジャズ」の氾濫に移ってゆき、「かれすすき」にもなりたくないし「ジャズ」に押し流されたくも無い人達が若さのはげぐちを登山に求めていた時期であった。日本橋堀留町に「アルペン」と言う喫茶店を開業した浮貝二郎氏の所へ、前田弥五郎氏をはじめとし、今村・栢割・吉田・田辺氏などが集まり赤毛布（あかゲット）山岳会を結成し事務所をここに置いていた。一方、志馬寛氏・中村治夫・横田氏等の日本橋山仰会が昭和3年頃八ヶ岳夏沢峠附近で、浮貝グループとばったり出会ったのをキッカケとし、街や山でしばしば顔を合わす様になり、いつしか両山岳会の人達は区別を忘れて一団の様になって交際を続ける様になった。

「アルペン」は浮貝さんの兵役入隊をもって閉店され、昭和4年に新築した志馬さんの家の玄関に続く三畳と六畳間が、両山岳会員の入混じった団樂の場所となり、ここでは山の話だけではなく人生、社会、思想等に就いても談論され、梁山泊的な雰囲気を作り上げていた。そんな雰囲気の中、昭和5年5月24日、日本橋の割烹「梅むら」にて会創立委員会が開催され、前田氏の命名する「東京トボケルカイ」・「東京登歩溪流会」が誕生する事となった。

当初の会は、会規にも有る通り、「趣味あ

る旅行及び登山」を目的としており、第一回行事は昭和5年6月の「初夏の大島」の旅であり、山だ、キャンプだ、海水浴・観月会・スキー行・映画鑑賞等を行い、昭和6年3月からは志馬氏の経営する喫茶店「峠」が開店し、以後は毎月10日に「峠の集い」、20日に「山男の夕」の集いが開催された。

昭和7年末の総会で、当会は山岳団体であるから趣味の旅行等は切離すべきだ、との規約改正案が決定され、昭和8年からは純然たる山岳団体として活動が始まる事となったが、会員の内56名が退会し38名でのスタートとなる。

谷川岳研鑽期

この年から岩登りに本格的に取組む様になり、谷川岳へ一ノ倉沢へと通う様になった中で、8月に、既に一ノ倉沢で5つの初登攀記録を持つ山口清秀氏が中村治夫氏の紹介で入会し、岩登りに益々専念する様になる。9月から谷川岳南面オジカ沢の無雪期、一ノ倉沢4ルンゼ〜4ルンゼ奥壁、日光雲竜峡アカナ沢大鹿落し、一ノ倉沢4・5ルンゼ中間稜、幽ノ沢左保一ルンゼの初登攀が行われた。

昭和九年には積雪期の谷川岳南面オジカ沢、ヒツゴー沢、東面幽ノ沢左保滝沢、無雪期の一ノ倉沢1ルンゼ、同5ルンゼ、中央奥壁右ルート、二ノ沢本谷を初登攀したが、9月には一ノ倉沢本谷バンドまで同行した明峰山岳会の溝口他2氏の遭難を知り、生存者の救助と、遺体収容作業を明峰山岳会と地元の方々との協力を得て無事終了する事が出来た。

昭和10年は積雪期に谷川岳万太郎谷本谷、仙ノ倉谷東ゼン、西ゼンの登攀下降に、残雪から無雪期には一ノ倉沢二ノ沢右保を始め8ルートに初登攀を行った。8月に谷川岳山頂

広場他に指導標を建設し、登山者の遭難防止の一助とせんと心掛けたが、9月に谷川岳南面幕岩に於いて岩田・村上の両氏が墜落死亡する当会として初めてとなる遭難事故を引き起こした。

昭和11〜12年は前年の死亡事故の故もあり又四月に山口清秀氏の弟幸吉氏が一ノ倉沢5ルンゼにて遭難死亡し、会の活動がその捜索に追われ登攀活動はいよいよ慎重になり、初登攀は谷川岳幽ノ沢左保3ルンゼの一つだけになり、他は女人禁制をモットーに入会を拒絶し続けてきた当会が、遂に根負けして入会を認めた笹渕奈美子氏の女性としての初登攀記録が堅炭沢βルンゼ、一ノ倉沢二ノ沢左保幽ノ沢右保右保リンネの3つと彼女がリーダーとして登った幽ノ沢中尾根の初登攀だけであった。

昭和11年5月に谷川岳研鑽結果をまとめ、「谷川岳」を発刊しとりあえず谷川岳研究の一区切りを付け、会の目標は谷川岳に置きつつも他を模索しつつ、昭和13年には八ヶ岳立湯川、赤岳大門沢、地獄谷赤岳沢の研鑽に入り、昭和14年には老朽化した谷川岳の指導標の再建も果たし、谷川岳へ通いいつも北ア穂高滝谷、南アの積雪期登攀にも向う様になった。

八ヶ岳研鑽期

昭和15年には一ノ倉沢で又も遭難死亡事故を起こし、更に遺体収容作業中にブロック雪崩で二重遭難事故まで起こし社会に大きな波紋を引起こした。16年には水野恵雄氏を南アルプス百間洞小屋附近で疲労凍死させる事故を起こしながらも、関西支部が結成され、また、谷川岳には待望の山小屋が竣工し、期待が大きく膨らんだが、国は日中戦争に続き日

米戦に突入し、17年1月には応召入営会員が17名とも成り、段々と山へ行つていられる様な状況ではなくなってきた。だが有志により八ヶ岳の研鑽が続けられ、昭和16年から18年の間に夏冬合わせて12ルートの初登攀が行なわれたが、18年春にはあれだけ強靱な精神力と体力の持ち主であった笹淵奈美子氏が病にて世を去る事と成った。

昭和19年とも成ると「山へ行かずとも山に居ると同じ様な生活状態」と竹越さんが言われている様な状況となり、山へ出掛けるどころではなく、会の活動は終戦を迎えるまで中断状態となった。

太平洋戦争に敗れ、その日の食もまま成らない日々が続く、ようやく会としての動きが始めたのは、昭和21年秋を過ぎる頃となつてからであった。しかし昭和22年に入るも山へ行くには、装備の不備、取得難、食糧難、交通難等極度に制約を受け、また会員同志の消息も不明確な事もあり、充分な連絡体制が出来ておらず、各個バラバラな山行を続ける状態であった。そんな状況の中でも戦前に続いて八ヶ岳に於いてある程度の成果を上げることが出来た。昭和22年から24年迄の間で八ヶ岳の研鑽はかなり進み、この3年間に八ヶ岳で10ルートの初登攀を行うことが出来た。戦後も、これからだと言うこの時に、第一線で活躍していた松濤明氏が有元克己氏と共に、北アルプス槍ヶ岳北鎌尾根で起こした遭難事故は会に大きな衝撃を与えた。その捜索、遺体収容、事故処理等は関係各位のご協力を得てようやく終わったが、この遭難に対して世間には種々様々な憶測が乱れ飛び、これに対する回答ともなり、また当方で知って貰いたい事もあり、一切を挙げて遭難顛末を公

表したいと考え「風雪のピヴァーク」を発刊した。そんな事で一年が過ぎ、ようやく動き出したのは昭和25年に入ってからであった。この年は岳連が計画した積雪期上越国境縦走に参加する事から始まり、積雪期の八ヶ岳に、南アルプスに、北海道利尻岳にと活動の場を広げていった。

停滞期からリマラヤへ

昭和26年、29年、積雪期登攀が当り前となる中で、越後三山の積雪期初縦走、八ヶ岳地獄谷の2ルートの積雪期初登攀、知床での初登攀と積雪期の足跡を残してきたが、会のとまりまどめ役であった井上浩二氏と竹越利治氏があいついで亡くなられた。この事はこの後の会にとつて大きな影響を残す事になった。

昭和30年は、この3、4年会員が一人となつた関西支部を閉鎖する事であり、以後会の第一線を率いていた川上氏が退会し、会津に奥只見にと活躍していた宮野・服部氏も上層部と折合が付かず会を去つて行く様になり、会内部の新旧会員の間がうまく纏まらない、昭和32年5月谷川岳南面幕岩Cフェースにて、入会間もない竹内・亀井両氏が墜落死亡し、34年1月には北アルプス北穂高沢で佐藤・保坂両氏が雪崩にて死亡し、会としての停滞期に入る。

昭和37年頃からは、横山・加藤・国井等の若い会員達により夏季の越後佐梨川、水無川の開拓、また谷川岳幽ノ沢の冬季登攀にと活躍を始めた。昭和40年に入り戸隠山と一ノ倉沢において会に無届の山行により2人が遭難死亡している。42年には穂高屏風岩で矢部が墜落負傷の後死亡する事故を起こすも、43年には会として初めてのヒマラヤとなるパン

ジャップヒマラヤ・バランマ峰へ遠征隊を送り出した。しかし小原ケイ氏の遭難死により退却し、44年には一ノ倉沢で山田長政氏が墜落死し、46年にも一ノ倉沢にて高橋四郎氏が墜落負傷し、病院にて死亡と、毎年の様に遭難死亡事故を起こしてきた。

その様に不祥事が続いた会ではあったが、昭和46年冬の利尻岳合宿を転機として、47年、51年は越後の山へ会の目標を向けつつも、47年には再びヒマラヤへ向かい、ネパールヒマラヤ・スプツェへと遠征隊を送出し、スプツェ北西峰に初登頂する事が出来た。その後ヒマラヤは昭和53年にネパールヒマラヤ・ツクチエピークを目指したがネパールにて交通事故に遭い中止となり、

58年のナンガパルバット遠征は雪崩に遭い志村一夫を亡くし敗退するが、昭和61年になりカラコルムのガツシャーブルム1峰を北面クローワールより清水脩・和久津清氏により登頂し当会として始めて8千米の峰に足跡を残す事となった。

その終焉

この間にも昭和49年に北アルプス赤沢岳で桜井君が転落死亡、51年に利尻岳仙法志稜にて目時・平野両君が遭難死亡、54年には奥秩父にて山田成子・内田澄子両氏が原因不明の死をきた

した他、55年河原君が富士山吉田大沢で落石に当り死亡、59年に赤崎君が西丹沢・悪沢で墜落死亡を遂げた。

会最後の遭難死亡事故は昭和63年1月ナンガバルバットへの訓練も兼ねて登った北アルプス劔岳源次郎尾根における堀越君の墜落であった。その捜索と遺体収容にその年の大半が使われ、無事収容作業は終らせられたものの、会自体も会報等記録に残る範囲での活動はこの年をもって終わつたと思われるが、堀越君の追悼号の発刊が平成4年であるから、それ



創立60周年記念山行 会津駒ヶ岳



創立75周年記念親睦会 湯檜曾温泉 ホテル「湯の陣」にて

までは何等かの活動はしていたと思われる。その後は活動記録は一切無く、創立以来約60年の間に28人の犠牲者を出し、112件の初登攀を記録した山岳会も、その名と数名の会員を残すのみとなって更に20年を経過し、今年、平成22年に創立80周年を迎える事となったが、そこは最早臨終の床の中である、あといか程で消え去る事か。

戦前は「当店は新店である」の心意気で諸

事こだわりなく活動を行い、何か事ある時は「何事も会のため」の一言でまとまる事の出来た会員の心も、戦後20年近くも経つと、個人の自由と利益を優先する風潮が社会全体に浸透し、新旧会員間の考え方も極端に違う様になり、戦前からの会員は会を離れ、OBだけの会を結成し、親睦会として活動する様になり、戦後の会員も諸情勢により会から離れて行った。

残った戦後育ちの会員同士でも会を統一してまとめる事は難しくなつた上に、趣味の多様化も進み、体を酷使して行う登山等へ向う若者は年々減り、後を継ぐ者が皆無となつてしまつた。
登山と言う行為そのものが、人のために行うものでもなく、人に見せたり聞かせたりするためにあるものでもなく、個人が自分のために行っているものであるかぎり、その志を共有出来る人が居なくなれば、山の会も存在する必要は無くなり、またあえて残す必要などどこにも無い。
かつて登られていた山道が、また昔の跡程度に細くなり獣道と見分けの付かなくなる頃、大自に憧れ、再び登山にその青春を賭ける人達が

現れた時に、昔々、夏も冬も命懸けに山へ登り続けた馬鹿者共が居た事の証として、社会人山岳団体「トボケル会」の関係資料を、ここ市立大町山岳博物館に寄贈致してありますので、もし宜しければ何かの参考に御利用頂ければ幸いです。

〔徒歩渓流会OB会 世話人代表〕

寄贈書籍一覧

会報 昭和5年6月号

昭和63年(年報)まで

会誌 登歩渓流 創刊号(部分コピー)

401冊

会誌 登歩渓流 2号

1冊

会誌 登歩渓流 3号

1冊

会誌 登歩渓流 4号

1冊

追悼号

各1冊

「九法好太郎・安田政雄 両君追悼号」

「風雪のビヴァーク

「井上皓司 君 追悼号」

「竹越利治 氏 追悼号」

「佐藤金吾・保坂博 両君追悼号」

「パンジャブ・ヒマラヤバランマ峰

「山田長政 君 追悼号」

「高橋四郎 君 追悼号」

「桜井功 君 事故報告書

「孤峰 目時良久・平野辰一 両君追悼号」

「遙かなるツクチェイク

「石楠花 平田恭助・藤田喜三郎・

大塚良治・葉師菊夫・岡野武雄

五君 追悼号

「山旅のらくがき」

小原ケイさん 追悼号

「ナンガバルバットに逝く」

志村一夫 君 追悼号

「ある日岩場で」

堀越道朗 君 追悼号

「日本国民登山精神の確立」

志馬寛著

「八ヶ岳」

山と溪谷社

「風雪のビバーク」

朋文堂

「風雪のビバーク」

二見書房

「風雪のビヴァーク」

山と溪谷社

「踏跡」

山口清秀著

「遠い頂 スプツエ」

1冊

「一郎・綾の生涯」

荒川一郎

「山草スケッチ集」

荒川一郎

「私の谷川岳」

杉本光作

「登れより高く」

1冊

「スリリングスキーツアー」

1冊

「わが旅路」

内田泰夫

「二人のアキラ、美枝子の山」

大熊孝三郎

「文芸春秋社

1冊

以上

山と博物館 第56巻 第9号
発行 千九百九十二年九月二十五日発行
〒398-0002 長野県大町市大町八〇五六一
市立大町山岳博物館
TEL 〇二六-1121011
FAX 〇二六-1121111
E-mail: shanpakku@city.omachi.nagano.jp
URL: http://www.city.omachi.nagano.jp/sanpakku/